

# 留学生の部

## 留学生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

### 2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、 「創るもの」

今から15年後の2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？  
皆さんが今よりもっとわくわくした毎日を送り、社会も豊かになっている姿（様子）を描いてみてください。

「守破離（しゅはり）」という言葉があります。  
剣道や茶道など「道」の世界で、修行の段階を表す言葉です。「守」で基本となる教え（型）を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作上げた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で、「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え（思想）です。

「守破離」のような視線で未来像を描けないでしょうか。  
今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る（守）」、次に旧態依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す（破）」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る（離）」。このような3つの活動や挑戦が過去から積み重ねられ、世界中で様々な発展が生まれて、今日に繋がっているとNRIは考えます。

未来は誰にも分かりません。2030年代にかけて起こりそうなことをイメージした上で、皆さんが望ましいと思う未来社会の姿を描いてください。  
そのような新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい（貢献したい）のかをまとめてください。

2030年代は、皆さんが社会の中核となって活躍する時代であり、皆さんの世代が「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思・責任感を持って、具体的な行動を起こすことが不可欠です。

皆さんの知識や実体験に基づいた独自の観点から、革新的な未来社会の姿を提案して下さることを期待しています。

\*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。



大賞 [留学生の部]

## 問題解決学科

——「守破離」の精神から

北海道大学大学院 経済学研究科 修士課程1年

李超君 り ちょうくん (中国)

将来の日本に必要な、問題意識を持った人材を育てるために、大学教育における「問題解決学科」の設置を提言。その根拠、設計の具体性、実効性は審査委員の評価を集めました。文章力と論文としての完成度の高さも際立っていました。

### 1. はじめに

近年、人的資本が社会の話題になっている。最近話題の本、トマ・ピケティの『21世紀の資本』の中でも、人的資本を重要視し、その人的資本が貧富格差を縮小する重要な力であると指摘されている。特に、少子化問題が深刻である日本社会にとっては、持続可能な経済成長を果たすための人的資本が重要な課題である。

大学教育は、人的資本の蓄積に対して極めて重要な役割を果たす。日本だけではなく、他の国も大学教育の重要性を認識し、多くの力を注いでいる。日本の場合、2015年5月末に、文部科学省から国立大学に通知する素案が公表されたが、内容を簡単にまとめると、「文系の学部・大学院の廃止や定員削減を早急に進めよ」というものである。

私にとっては、それはかなり衝撃的であった。もちろん、経済学的な観点から見ると、科学技術が経済成長に対する貢献度が高いのは事実である。確かに理系の人的資本が、文系の人的資本より一般的に高く評価されるかもしれない。ここから考えると理解できないわけではない。

だが、学問の本来の目的から見たらどうだろうか。学問の価値は、「人的資本=将来利益の現在価値(貨幣価値)」だけでは測れないだろう。もし、学問の価値も将来の貨幣価値で測れば、大学は貨幣価値を創造できる資本主義の部品を作る工場でしかないのではないかと。ゆえに、改めて大学の果たす社会的な役割を考えなければいけない。

「守破離」は、武道や禅の教えとして有名な言葉である。基本を「守」りつつ、それを「破」り発展させ、最後に既存の型から「離」れて独創的なものを創り出すことを意味する。学問とは何かを考えるうえで、「守破離」の精神は不可欠だと思われる。本稿では、「守破離」をキーワードに、今後の日本社会にあるべき人的資本について考察する。

### 2. 守——学問の多様性を守ろう

学問というのは、その文字の通り、長い間、人々が学習しながら問う、問いながら学習することで形成されてきた結晶体である。そこには、人々が学習しながら問い、問いながら学習する過程で同じ観点が集まり、さらにその学問が拡大したり、同じ観点から違う観点が分裂し、新たな学問が誕生する進化のプロセスが存在する。

他方、筆者が専攻する経済学では、2010年に日本学術会議が大学における経済学教育の参照基準を公表した。その内容は、主流経済学である「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」が経済学カリキュラムの基本であり、それに「統計学」を加えたものを基礎科目とし、他のいくつかの科目をその応用分野とする「経済学の体系」が示された。ゆえに、このような「経済学の体系」に合わない社会経済学や経済学史といった科目は排除ないし周辺化されるべき対象となり、究極的には、歴史的要因・制度的要因・思想的要因に関わる科目はすべて周辺に追いやられることになる。

経済学は他の科学と違って、人類の活動を研究する科学であり、不確実性、予測不可能性が多い。グローバル化とともに、世界は急速に進化している。新たな情報、新たな商品がほぼ毎日新たに出てくる。その中で、人類の活動も進化していく。つまり、経済学という学問は人類の歴史とともに進化していると言える。ゆえに、経済学にとって、その多様性は極めて重要な特徴であり、その多様性を否定する上記の参照基準の提案は、経済学の有する可能性を毀損しかねないものとなる。高等教育の質を保証するために、参照基準を公表することに反対ではない。だが、基本的には大学教育の多様性を損なわず、教育課程編成に係る各大学の自主性・自律が尊重される枠組みを維持すべきだと思う。

### 3. 破——専門<sup>かまち</sup>の框を壊そう

大学の役割は、大きく2つに分類できる。1つは優秀な人材を育てること、もう1つは最先端の研究を先導していくことである。では、優秀な人材とはどのようなものであろうか。将来利益の現在価値(貨幣価値)が多く創造できる人が優秀な人材なのか。筆者は、問題意識を持って問題を発見し、解決できるように努力していく人間が優秀な人材だと主張したい。

ここで2つの問題を指摘したい。

1つは専門本位の教育方式である。例えば、地球温暖化のような環境問題を解決するためには、環境科学の専門的なメカニズムだけではなく、経済学と政治学の知識も重要である。しかし、環境経済学という科目が開講しているが、これは経済学研究科の科目であり、環境科学研究科の学生はほとんど履修しない。逆に、環境経済学を研究している学生は、環境科学の専門的なメカニズムや技術については詳しくない。もちろん、他の学部の講義を聴講することは可能であるが、基本的に自分の学部の授業を履修しなければならない。

ゆえに、ここで提案したいのは「専門本位」の教育方式ではなく、「課題本位」の教育方式である。課題本位の教育方式とは、自らが興味を持つ課題に応じて、その課題解決のために、専門を問わず役に立つ授業を履修する方式である。

もう1つの問題は、今の大学の教育システムでは、ほとんどの学生は学部のと き問題意識を持たず、専門知識を勉強するということだろう。修士課程に進学したら研究計画書を書いて、自分が興味を持っている課題を研究する。つまり今の大学の教育システムでは、このような問題意識を持ち自ら知識を蓄積できるのは修士課程からであるという点である。したがって、学部学生にも、専門知識の形成だけではなく、問題意識や問題解決能力を養成できるような学科が望まれる。

### 4. 離——問題解決学科を創ろう

私は「問題解決学科」を創ることを提案したい。ここで、問題解決学科をPS (Problem Solving) 学部と略称する。

2年前から、北海道大学では学部向けの新渡戸カレッジ<sup>1)</sup>というプログラムが進行している。新渡戸カレッジもPS学部のように学生の専門を問わず入学することができるが、基本的に自分の学部の授業を中心にしている。また、新渡戸カレッジは問題解決の養成よりも、世界の共通語である英語を使って、様々な背景を持つ人々と円滑にコミュニケーションをとるスキルを養成することが重要な目標である。PS学部の目標は、高度な専門知識を有するだけでなく、問題意識を有し、他の人と協力しつつリーダーとしてイニシアティブをとれる総合力を有したグローバル人材像を養成することにある。

#### 4-1. 学生募集

大学の全学部2年生から30名ぐらい、元の専門を問わず、各学部から問題意識を持っている学生を募集する。2年生から募集する理由は、学部の1年次は自分が解決したい課題を考えたことがないかもしれないし、もし解決したい課題があっても、その現実性や専門性に精通できていないかもしれないからである。今のほとんどの日本の大学では、1年生は「全学教育科目」を履修して、専門科目を履修するための基礎知識を勉強する。北海道大学の経済学部の「全学教育科目」の場合は、社会科学系の学問領域にとどまらず、自然科学や人文科学など、幅広い学問に触れることができる。幅広い学問に触れる過程で、自分の解決したい課題も考えることができるし、その現実性や専門性を理解することもできる。

なぜ30名ぐらいしか募集しないのか。後でも説明するが、教育の質を重要視するため、PS学部は大学の多くの資源を占有するからである。

PS学部の入学試験は、研究計画書と英語の試験からなる。研究計画書では、解決したい課題が社会に対する意義と現実性、学生が社会に対してどの程度の責任を持っているかが重要なポイントである。また、グローバル化とともに、外国の研究者や他の分野の人材と協力して行くためには英語力も不可欠である。

#### 4-2. 授業方式

PS学部に入学した学生の問題意識を参照し、それらを例えば日本の人口問題、世界の環境問題、日本の持続可能な経済成長問題、発展途上国の飢餓問題、発展途上国の教育問題などの大まかなカテゴリーで括り、学生をグループ分けする。

PS学部の授業方式は少人数のグループ授業であり、メンバー1人に対して、4~6人の生徒で授業を行なう方式である。同じグループである4~6名の学生たちは、共有している問題意識に基づき、課題を解決すべく協力する。そこでは、みんな同じ授業を履修してもいいし、課題を解決するための知識をメンバー間で分担すべく別々の授業を履修してもいい。そのために、PS学部の学生は、どのような学部や大学院の授業も履修可能であり、大学側はそのための施策を講じることになる。

#### 4-3. 問題点

このようなPS学部には、主要な問題が2つ存在する。

- ① 留学などでPS学部から離れる際には、他大学で同様の質を有したカリキュラムを履修できない恐れがあり、国際的に大学間でPS学部構築のために協力する必要がある。
- ② PS学部の設立は、多くの大学の多くの教育資源を占有し、他学部の学生や教員に負担がかかる可能性がある。

## 5. 終わりに

日本人の友達と色々話をしたときに聞いたことがある。「なぜ日本人の学生は留学をしたくないの？」彼女の答えを聞いたら、すぐに「確かに」と共感できた。「日本が住みやすいから」。中国、韓国に長い間住んだことがあるが、確かに筆者にとっても日本が一番住みやすかった。どの国へ行っても、日本が一番住みやすいと感じるだろう。これは、日本人の、他の人に迷惑をかけないという価値観と関係があると思う。日本人は不満があっても、それを話したら他の人に迷惑をかけるから文句を言わない場合が多いと思われる。また、「12人の優しい日本人<sup>2)</sup>」という映画のように、日本人は「優しい」から自分の意見を言わず、大勢の意見に従おうとするのかもしれない。

その社会の雰囲気、価値観の長所として、みんな「優しい」からお互いのトラブルが少ない。社会が安定的である。つまり住みやすい。だが、短所も多いと思われる。みんな「優しい」からお互いのトラブルや、さらには社会的な問題を解決しようとするのを避ける傾向があると思われる。避けたら解決できる問題もあるが、ぶつけて倒れなければいけない問題もある。

今の日本人、特に若者は問題意識がない、起業家精神がない<sup>3)</sup>とよく聞かすが、そのような「優しい」文化と関係があると思う。だが、社会的な雰囲気、価値観は長い間を通じて形成されたものであり、簡単に改変することはできないし、改変する必要もない。ただ、私が提案したいのは、何人かの人の意識を改変しようということである。少数であっても、他の人をリードし、他の人に影響を与えて社会的な課題を解決していくことができれば、他の人の問題意識を喚起できるのではないか。さらにPS学部が培う問題意識は、起業家精神の中でも、社会のイノベーションを実現できる基礎要因だと思われる。ここで、中国の有名な企業——アリババ・グループの代表者ジャック・マーの有名な言葉を借りたい——「問題があるところにチャンスがある」。

このような人材は、冒頭で論じたような理系学部を推進する近視眼的な教育目的では育成することはできない。文系理系を問わずに、自身の問題意識に応じた多様な学問を学ぶことが不可欠である。このような人材を大学が輩出してこそ、大学は社会的な存在意義があり、経済的にも文化的にも社会を豊かなものにする礎となる。

文中注

- 1) 北海道大学 新渡戸カレッジプログラム  
<http://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>
- 2) 三谷幸喜が東京サンシャインボーイズのために脚本を書き下ろした舞台劇、およびそれを原作とした1991年制作の日本映画
- 3) 世界銀行 Doing Business 2014によると、日本の起業のしやすさランキングは世界120位  
<http://matome.naver.jp/odai/2139899436225745101>  
平成25年度創業・起業支援事業（起業家精神と成長ベンチャーに関する国際調査）『起業家精神に関する調査報告書』  
[http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331\\_gem\\_tyousa\\_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%](http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%)

参考文献

- ・ トマ・ピケティ『21世紀の資本』みすず書房、2014年
- ・ 一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター 平成25年度創業・起業支援事業（起業家精神と成長ベンチャーに関する国際調査）「起業家精神に関する調査報告書」平成26年3月  
[http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331\\_gem\\_tyousa\\_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%B7%E6%A5%AD%E5%AE%B6%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E4%BF%82%E6%95%B0](http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%B7%E6%A5%AD%E5%AE%B6%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E4%BF%82%E6%95%B0)
- ・ 日本学術会議経済学委員会 経済学分野の参照基準検討分科会報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 経済学分野」2014年8月29日  
<http://www.iwamoto.e.u-tokyo.ac.jp/memo/SBS/kohyo-22-h140829.pdf>
- ・ 経済学分野の教育「参照基準」の是正を求める全国教員署名 2013年10月28日  
<https://pro.form-mailer.jp/fms/8fe8371a49520>
- ・ 北海道大学 新渡戸カレッジホームページ  
<http://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>

【受賞者インタビュー】

受賞できたことで、  
これから頑張っていく  
原動力を得た



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

今回の論文コンテストのテーマの中で、「守破離」という言葉に興味を持ち、自分のアイデアを「守破離」の精神から表現したかったからです。

——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

論文を書いたのは1週間ぐらいですが、いろいろ資料を調べたり、頭の中で構想を練ったりすることに長い時間がかかりました。

——この論文を書く上で苦勞したことはありますか？

論文を書く文法や表現は、日常生活に使われる文法や表現と違いがあるので、外国人として正しく書くのが難しかったです。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

まずは、入賞して本当に嬉しかったです。今回の論文は自分自身についてもひとつの肯定となりましたし、これからもっと頑張っていくための原動力になりました。

——今、どんなことに興味を持っていますか？

今は、日本や中国の貨幣問題に興味を持っています。

# 中国留学生から見た 青森県の地域活性化について

弘前大学大学院 人文社会科学研究所 修士課程2年

金 春海 きん はるみ (中国)



青森県産のりんごを出発点にした、青森と世界という複眼的な思考に独自性がありました。留学生として青森で生活する筆者にしか書けない、実感に基づく具体性に富んだ記述や、図表を用いた考察のユニークさ、多様な調査を実施した積極性も評価されました。

少子高齢化が急速に進んでいる地方、若者の流出も高まり、東京一極集中となりつつある今日、地域創生は迫った課題となってきた。青森県も例外ではない。増田寛也さんの『地方消滅』では、2040年に青森県の20～39歳の女性は50%減少するそうだ。筆者は弘前大学の学生であり、青森で2年間の留学生生活を送ってきた。本論では留学生の視点から青森県の地域活性化をいかに創るべきか検討し、その対策について、りんご輸出の拡大、そして観光産業の盛り立て、この2つの面から述べる。

経済発展が目覚ましい諸国に対する「高級」果実の輸出は、注目を浴びてきた。青森県は農林水産業を営んでおり、特にりんごは全国でも有名で、高い評価を得ている。青森は日本一のりんご産地であり、りんごといえば青森、青森といえばりんごと深い繋がりがあがる。しかし、りんごの輸出は台湾への依存度が90%と高く、中国の内陸都市への輸出はほんの少ししか見られない。日本に隣接している中国は、ご存知のように13億人以上の人口を有している国である。そのため、中国市場の開拓がうまくいくと、青森県産りんごの輸出は更なる拡大が見込まれる。

2014年2月、筆者は弘前大学の「地域の創生に貢献する人材の育成プログラム」に参加し、上海で青森県産のりんごを販売しながら、卸売市場の上海輝展果蔬市場と繁華街の高級スーパーOle、この2カ所で青森県産品のりんごの値段についてアンケートを行った。

上海輝展果蔬市場は、世界各国から果物を仕入れて、小売店に向けて販売する卸売市場である。そして、Oleは外国系スーパーで、パン、ワイン、カットサラダ、果物、チーズ、ハムなど、在住外国人向けの食材が揃っている。Oleでは果物の売り上げが一番だそうだ。

それぞれのりんごの値段について統計したところ、上海輝展果蔬市場では、金星が28玉で460円(1玉約320円)、サンふじが14玉で260円(1玉約370円)、世界一が11玉で280円(1玉約500円)、王林が32玉で367円(1玉約230円)であった。一方Oleでは金星が1玉76円(約1,500円)、サンふじの場合、小さい玉は1玉40円(約800円)、ちょっと大きい玉は1玉76円(約1,500円)、世界一は1玉122円(約2,440円)、王林は小さい玉が1玉41.8円(約800円)、大きい玉が1玉76円(約1,500円)である(表1)。

表1 青森県産りんご1玉あたりの値段の比較

	上海輝展果蔬市場	Ole
金星	320円	1,500円
サンふじ(小)	370円	800円
サンふじ(大)	不明	1,500円
世界一	500円	2,440円
王林(小)	230円	800円
王林(大)	不明	1,500円

2015年8月 筆者が調査結果を元に作成

表2 りんご移出業者の商協連加盟数

(単位:社)

年	商協連加盟数
S.58	320
H.10	130
H.15	118
H.20	94
H.25	79

出所: 講演稿「りんご移出業者の出荷戦略と在庫管理」  
北山 和彦 2015年

表3 全国のりんご収穫量と青森県のりんご収穫量

(単位:千t)

年産	全国りんご収穫量	青森県りんご収穫量
S.51	879	416
S.52	959	475
H.元	1,045	503
H.2	1,053	501
H.10	879	477
H.20	911	493
H.23	655	368
H.24	794	446
H.25	742	412

出所: 講演稿「りんご移出業者の出荷戦略と在庫管理」 北山 和彦 2015年

表1から分かるように、上海輝展果蔬市場とOleで販売している青森県産のりんごの値段は、遥かに差がある。しかも日本国内に比べても相当高い。その原因はいろいろあると思うが、まずりんごを卸売市場、小売業者などに移出しているりんごの移出業者の商協連加盟数がどのような影響を与えているか見てみよう。表2で示したように、昭和58年に商協連加盟数は320社、平成10年には130社、そして平成25年には79社に減少し、この30年間で約4分の1になっている(表2)。

しかし、青森県のりんごの収穫量と全国のりんごの収穫量を見ると、青森県のりんごの収穫量は年々若干変化があるものの、全国でのシェアは高くなりつつある。このことから、りんご移出業者の変化はりんごの移出に大きな影響がないと判断できるだろう(表3)。

では、上海で販売している青森県産りんごは、なぜそんなに高いのだろう。その理由は、青森県産のりんごは形の揃いや大きさ、色の付きかたが良く、食味、芳香、鮮度などどこから見ても世界一の品質であるからであろう。中国で販売しているりんごを見ると日本に比べて小さいし、少し傷が付いているものもあれば、つるがあるものもないもの、ワックスが塗られているりんごなど、さまざまである。そのため、このようなりんごに慣れている中国人には、かえって青森のりんごは色がきれいで大きいから薬を入れていないかなどと心配をしている人も多く見られる。青森県の「キタエアップル」という会社から青森県産りんごを仕入れて、上海Oleで販売を手掛けている小売業者のJCKの斎藤青雲社長に聞くと、こんなに高い値段でりんごを販売しても、実は利益はあまりないそうだ。青森でりんごの輸出に携わる山野りんご株式会社の山野社長は、「りんごはアップルではない(This is not an apple. It is another kind of fruit!)」とキャッチフレーズを用いながら強調し、青森りんごと他のりんごとの差

別化を重要視している。このように、いかに青森県産のりんごを中国国内のりんごと差別化し、ブランド化して中国国民に知ってもらうかは、重要な課題の1つであると思う。

もう1つの課題は、りんごの価格である。2015年、青森の有袋りんごの栽培比率は30%を切っている。有袋は無袋に比べ、木箱1箱最低700円以上の高価格が付かないと作る農家は少ない。有袋りんごは色付きがとても良く、台湾では大好評である。しかし、栽培に手間がかかり、その分収益もないため、栽培をやめる農家が増えてきた。このままいくと有袋りんごの輸出価格が上昇し、台湾での市場が懸念される。有袋りんごの価格だけではなく、表1で分かるように、中国において青森県産りんごの価格は日本国内に比べて相当高い。りんごの輸出を拡大するには、価格を抑える措置を取る必要があると思う。そのためには国内の小売業者だけでなく、海外の小売業者との取り引きを増やして市場を確保する必要があると思う。

前述したように、青森県産のリンゴの輸出は、台湾への依存度が90%と高い。しかし、台湾の衛生福利部食品薬物管理署(FDA)基隆弁事処は2015年3月24日、10社の台湾企業が、東京電力福島第1原子力発電所事故の発生で輸入禁止地域としている福島など5県の食品の産地を偽装して申告している事例を発見したと発表した。FDAは産地偽装の疑いのある食品283件のリストを公表し、輸入企業に対し、卸し先の企業に市場から商品を撤去するよう通知した<sup>1)</sup>。産地偽装を防ぐために台湾政府は、原産地証明の添付と、野菜・果物・乳製品などの特定食品について、公的機関が発行する放射能検査済み証明を希望している。このような「食品の産地偽装問題」により、台湾では日本からの食品輸入について規制が強化されることとなった。台湾は福島原発の事故発生後に福島、茨城、栃木、群馬、千葉の5県の食品輸入を禁じていたが、この事件

後は残る42都道府県の食品でも産地証明書の添付が必要となると発表した。これは青森県にも影響が及んでいる。マルジン株式会社の社長に話を伺ったところ、現在、台湾にりんごを輸出するには、りんごの産地を明記する以外、農林水産省の検査を受ける必要があり、前より一層手間がかかるようになったそうだ。中国内陸でのりんごの需要が高まると、このような事例が再び発生するかもしれないので、日本の関連部署からもそれを防ぐために前もって措置を取っておく必要があるのではないかと思う。

それでは、次に青森県の観光産業の盛り立てについて述べたいと思う。青森県は四季鮮明な所であり、春は桜祭り、夏は弘前ねぶた祭り、青森ねぶた祭り、秋は紅葉祭り、菊祭り、冬は雪灯籠祭りなど四季を通じて祭りがあり、何よりも世界遺産の白神山地、十和田湖、十二湖、八甲田山などの自然風景が絶景である。温泉地の数は全国で4位と高い位置を占めている。しかし、このような四季を通じて観光が楽しめるきれいな所が、まだそれほど中国人に知られていないのが現実である。2010年の中国における日本の都道府県の知名度を見ると、中国に最も知られている都市は東京、次いで大阪、京都は第3位で、その次が北海道である。そして、沖縄が第5位、広島が第6位、福岡が第7位を占め、青森県は23位である。青森県のすぐ隣に位置する北海道の知名度に比べて、青森県の知名度は信じられないほど低いことが分かる。

実は北海道の知名度は、2008年12月に中国の馮小剛監督が『非誠勿擾』という映画を撮影した後に飛躍的にアップしたものである。北京出身の馮小剛監督は、この北海道ロケに関し、交友関係のある人物の紹介で、1990年代に東京から釧路へフェリーで訪問したことがあり、本人はひどく風景に感動したそうだ。映画の中に出演している主人公の舒淇（スー・チー）、葛優（グォ・ヨウ）、徐若瑄（ビビアン・スー）は、中国で大人気の俳優である。この映画の後半の主な舞台は日本の東北海道の釧路、阿寒湖、網走、厚岸、斜里、美幌で、その映画は中国で大ヒットとなり、中国に北海道観光ブームを巻き起こした。表4は2000年から2013年までに北海道を訪れた中国人の観光客数を示したものである。北海道を観光した中国人は2002年の5,200人から徐々に増え、2008年は47,400人に達している。その後の2009年、2010年、この映画を撮影した後のこの2年間の数字に注目してもらいたいのだが、北海道への観光客数は2008年の47,400人から急速に増え、2009年に92,700人と前年度対比で95.6%増加し、2010年には135,500人と前年度対比で46.2%増加している（表4）。

この映画のシーンに出てくる観光スポットのJR釧網本線北浜駅、能取岬、町道朝日10号線、キリスト兄弟団斜里教会、阿寒湖、知床グランドホテル北こぶし、炬燵た浜っ子居酒屋等は、

今日でも中国人にとっても人気がある。もちろん、青森でも韓国ドラマ「優しい男」の撮影があり、このドラマは韓国で大ヒットしたが、主な舞台として登場するシーンが短く、しかも中国にはまだその影響が及んでいない。中国人に青森県を覚えてもらうためには、青森県のりんご農園、白神山地、十和田湖、十二湖、八甲田山などのロケ地を中国映画、ドラマの主舞台として登場させ、しかも登場するシーンを長く、印象深く撮影してもらう必要があるだろう。このような映画かドラマをたくさん撮影してもらうと、中国において青森県の知名度は当然高くなるし、青森県にも中国人の観光ブームが起こるのではないかと思う。

私は中国吉林省の延辺大学の日本語教育学科を卒業し、その後、大連のIBM株式会社に勤めたことがある。そんな私がなぜ日本にやってきたか今でもよく周りの人に聞かれるが、その理由は、会社に勤めていた時、日本人のお客様向けにサービスを提供していたが、その時、日本人のお客様からよく「中国人は日本語ができて日本文化、日本人の考え方が分からないと商売とかできないよ」という声を耳にしたからである。私が日本に来て一番驚いたことは、街の清潔さ、そして街の中の静かさだった。中国ではよく見かけるゴミが日本ではめったに見られず、ゴミ箱もビンや缶、ペットボトル、燃やせるゴミ等にきちんと分類されて設置されていることに驚いた。そして、街中を走る車は割り込みをせず、お互いに譲り合いながら進んでいるため、

表4 北海道の中国人客数

(単位:人)

年	中国人客数
2000年	2,400
2001年	3,900
2002年	5,200
2003年	5,800
2004年	12,050
2005年	15,650
2006年	17,350
2007年	26,950
2008年	47,400
2009年	92,700
2010年	135,500
2011年	101,400
2012年	102,200
2013年	158,300

出所：北海道経済部観光局が統計した訪日外国人来道者の推移を元に作成 2014年

クラクションの音が聞こえなかった。このような状景は、日本に来る前までは分からなかったことである。まさに、日本の文化、習慣、日本人の考え方等を理解しないと商売がうまくいくはずがないと思った。

この2年間、私は日本と中国の文化、習慣など異なる文化を理解するため、弘前で行われる祭り、イベント等に積極的に参加した。春の桜祭り、夏のねぶた祭、秋の菊と紅葉祭り、冬の雪灯籠祭りなどは、いずれも中国では体験できない貴重な経験となった。それだけでなく、私は弘前大学、岩手大学、秋田大学の3大学の合宿活動、着物の教室、市民との餅作り大会、りんご品評大会、津軽よさこい等にも積極的に参加し、日本人の学生、日本の市民と交流を深めた。そして、このような触れ合いを通して、日本への理解を深めてきた。表5は私がこのような活動を通じて感じた食文化、生活面の違いである。(表5は青森県で実感したものと中国東北地方の文化、習慣を比較して作成したものである)。私はこの経験を共有することで、日中両国の人々の円滑な交流に少しでも貢献できたらと思う。

#### 文中注

- 1) 日本貿易振興機構JETRO 世界のビジネスニュース「輸入企業による日本食品の産地偽装申告が発覚」2015年3月26日  
<https://www.jetro.go.jp/biznews/2015/03/55136689df250.html>

#### 参考文献

- 北海道公式ウェブサイト「北海道観光入込客数の推移」  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/irikominosuii.htm>
- 黄孝春・平本和博『りんごをアップルとは呼ばせない——津軽りんご人たちが語る日本農業の底力』弘前大学出版会、2015年
- 増田寛也編著『地方消滅——東京一極集中が招く人口急減』中公新書、2014年
- 戴二彪「訪日中国人観光客の旅行先分布構造と影響要因」東アジアへの視点 2012年  
[http://shiten.agi.or.jp/shiten/201203/shiten201203\\_01-12.pdf](http://shiten.agi.or.jp/shiten/201203/shiten201203_01-12.pdf)
- 田中重貴「日本産りんご輸出における産地流通主体の役割：青森県産りんごを事例として」北海道大学農経論叢 第62号 pp.141-150、2006年  
[http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/8355/1/62\\_12.pdf](http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/8355/1/62_12.pdf)

#### [受賞者インタビュー]

### 日本と中国の 架け橋になれるよう、 日本でITを学びたい



#### ——コンテストに応募した理由、きっかけは？

弘前大学に留学するときに、中国の友達や先生に「青森ってどこ？」と言われ、青森は知られていないんだなと思いました。青森県の知名度を高めたかったし、青森の活性化につながるのではと思って応募しました。

#### ——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

字数制限が一番大変でした。大学の研究で行っている上海でのりんごの販売活動や現地の人の声、そこで気づいたことなどを字数制限内にまとめるのにとても苦労しました。

#### ——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

青森では地域活性化という課題が活発になってきています。この論文を書いたことで、青森県の魅力をたくさんの人に伝えられたかなと思っています。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか？

PCでWebページを作ったりするのが好きで、IT技術者のための試験を受けようと思って勉強しています。ITを駆使して社会生活を支えることに興味があるので、日本で技術を学びたいです。そして将来は、日本と中国が円滑にビジネスができるように、「日本と中国の架け橋」のような人になりたいと思っています。

表5 日本と中国の習慣

	日本	中国
食習慣	ニンニクは値段が高く、家庭ではあまり使わない	ニンニクは値段が安く、料理によく使う
	野菜が高い	野菜が安い
	スーパーで売っている肉はステーキ用、ひき肉、角切り等に	肉はほとんど市場で1kgくらい買って、自分がステーキ用、角切りなどに切る必要がある
	生卵をご飯にかけ、醤油を入れて食べる	生卵は食べない
	ラーメンと餃子を一緒に食べる	餃子は主食、水餃子をよく食べる
	辛いものが食べられない	辛いものが好き
	お弁当のおかずの種類が多い	お弁当のおかずが少ない。大体1品か2品
	コロケ、から揚げ等の揚げ物をよく食べる	主に炒めた料理を食べる
	甘いものが好き	甘いものより辛いものや、濃い味のものが好き
	朝食はほとんど家で作って食べる（ごはんか、パン）	朝食はほとんど外で買って食べる（豆乳、揚げパン、おかゆ、肉饅頭、焼餅など種類がいっぱいある）
	どうもろこしは柔らかくてジューシー	どうもろこしは固い
	果物などは1個ずつ売っている	果物は1斤（500g）単位で売っている
	カクテルが安い	カクテルは高級なお酒であり、普通のレストランでは販売していない
	ビールは冷えている	ビールはぬるい、ほとんど瓶ビール、生ビールは少ない
	飲み放題をやっている居酒屋が多い	居酒屋は少ないし、お酒は瓶ビールか、白酒が主流。飲み放題の店はほとんどない
	人数分の料理、1人1人のためのお皿で食事	大きなお皿を複数の人が囲んで一緒に食べる
	りんごは焼いても食べる	焼きりんごはほとんどない。クリスマスイブにりんごを食べる
	刺身など生ものが好き	生ものはほとんど食べない
生活 & 文化	市民も大学の図書館に入れる	大学図書館に入れるのは、その大学の学生か先生のみ
	小学校の時から学校で水泳を教える	水泳はめったに教えない
	期末試験はレポートが多い	95%筆記試験
	迷惑をかける行為はしない	どこでも大きい声で話す
	電車やバスの中では電話をしない、電話はマナーモードに設定するか電源を切る	バスの中で普通に通話する
	運賃は後払い、運賃は距離によって違う。両替ができる	バスの運賃は乗る場所、降りる場所に関係なく値段は同じ。しかも前払い。両替はできないため、事前に用意
	車は走行中、クラクションを鳴らさない	常にクラクションを鳴らす
	どこのトイレにもトイレペーパーが置いてある	高級なデパート等を除いてトイレペーパーはなし
	すべての国民に医療保険がある。国が7割負担、国民が3割負担	会社員、公務員だけ。田舎の人や、自営業の人はなし。しかも3割負担でなくて、まず自分で全額を払って、その後保険会社に請求し、保険会社が保険対象内の業であるか、保険対象外の業であるかを判断し、保険対象内の業の料金を口座に振り込む
	子供を生んだら政府から補助金が出る。おもちゃや粉ミルクももらえる	一人っ子政策、次の子供を生むと罰金。政府からの補助は一切なし
	貸し出ししているアパートの中にほとんど何も無い	冷蔵庫、テレビ、ガス台、エアコンは基本的なもの、電子レンジなどは大家さんに相談可
	寒い東北地方なのに床暖房はほとんどない。ストーブかエアコンを使用	東北地方はどの家も床暖房か、スチームが設置されている
	銀行は土日ほとんど休み	銀行は土日営業
	通帳を使う人はまだ多い	お年寄り以外の人はカード、通帳はあまり使わない
	通帳を使って一覧をチェックする人が多い	お金の引き出しや、預かり入れ等の動きがあったとき、指定の携帯に通知する機能が設置できる
	カラオケを歌う時は、順番に1人ずつ回して歌う	歌いたい人が結構歌う。盛り上がるのが重要視されている
	ヘアカット代が高く、女性の場合3000円くらい（1000円カットを除く）	中国では約20-50元（400円～1000円）。1000円だったら結構高級なサロンでカットできる
	コンタクトを使う人が多い	めがねをかける人が多く、コンタクトを使う人は少数
	日本人は中学生ごろから化粧する	大学生も、会社員も化粧をしない女性がいっぱいいる
	運転手の席は右。左側通行	運転手の席は左。右側通行
	お湯はあまり飲まない	風邪を引いた時も、寒い時もお湯をよく飲む
	水道水を飲む	家にはウォーターサーバーを置いて水、お湯を飲んでいる。水道水は沸かさないと飲めない
	奇数が好まれる	偶数が好まれる
	結婚すると女性の名字は変わる	結婚しても女性の名字は変わらない
	おもてなしの心を重要視している	孔子の中庸思想が強い
	定年後、カルチャセンター等に通って勉強を続ける人が多い	定年後、ほとんど遊び、勉強している人はほんのわずか



特別審査委員賞 [留学生の部]

## デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか ——選択代行時代への移行

一橋大学大学院 社会学研究科 文部科学省国費研究留学生1年

朴 知遠 ぱく じおん (韓国)

タイトルにとどまらず、問題意識や着眼点がユニークで、文章の上手さで読ませる力も評価を得ました。デジタル化がさらに進行した2030年の未来では、考える力や周りへの関心といった「人間らしさ」を守るべきだという主張が印象的でした。

### 1. はじめに

#### デジタル時代の迷子：溢れる情報の海にて

インターネットの登場により、私たちの生活形態は一変した。通販サイトを利用して海外で販売されているものを簡単に手に入れたり、SNSを用いて自宅にいながら世界中の人々とコミュニケーションが取れる世界が到来したのである。技術の力は物理的制限を越えて、以前とは比べられないほど多様な生き方を可能にしている。このような流れの中で生まれたのが「ノマド族」と呼ばれる、デジタル遊牧民の存在だ。

彼らはどこかに束縛されず、独特なライフスタイルを持つ。全世界を旅行しながら自分の経験をSNSにアップしたり、本を書いて生活している人や、趣味で始めたブログが有名になり、そのブログの広告収益で生活しながら自分の会社を設立したケースもある。彼らの共通点は、常に新しいものを追求する態度である。トレンド戦争で負けてしまうと、すぐ忘れられてしまうウェブという新しい生態系の中で、ノマド族はトレンドを主導するリーダーとして日々奔走している。このような一連の変化は、企業にとって、既存のデータだけでは変化の速度に合わせて物を生産することが大変難しくなることを意味した。従って、速く変わっていく消費者の行動パターンに対して速やかな分析が出来る新しい技術が必要となったのである。

しかし、デジタル遊牧民のようにトレンドをリードする人は極めて少数で、大半の人達は溢れる情報の中で何を選べばいいか、混乱を感じている。心理学者ジョージ・ミラーによると、人間が一度に覚えらるる情報量は5つから9つだという。また、オックスフォード大学の進化人類学者、ロビン・ダンバーによると、人間が知り合って交流可能な最大人員は150名ほどのことである。にも関わらず、現在私たちが選べる商品の数は数万個を超え、SNSなどを通して知り合いが数千人を超える場合も多い。

私たちは毎日、数えられないほどの商品や人間に触れ合いな

がら何かを選択する。情報の急増は選択の幅を広げてくれたが、その代わりに不正確な情報、信用出来ない人間と遭遇する可能性も増やしてしまった。例えば、図1のように、私たちは旅行をする時、主にインターネットを用いて旅行先を決めている。しかし、その情報には広告や間違った内容も混ざっており、ネット上の情報だけで旅行先を選ぶと失望する可能性も少なくない。つまり、私たちは毎日の選択から「不確実性」に直面している。溢れる情報の海の中で、まるで迷子のように道に迷っているのである。このような問題を解消するため、消費者側でも「より正確で、役に立つ情報」を選別し、求めるようになった。そして、この願いはやがて、「ビックデータ」という新しいものへの探求を導いた。

### 2. ビックデータという幻：機会か、危機か

「ビックデータ」とは何なのか、ひと言で定義するのは大変難しいが、一般的には数えられないほど多くの情報を含んでいるデジタルデータの集まりを示す。ビックデータの発展には、インターネットの普及によって情報へのアクセスがより易くなったことが決定的な役目を果たした。企業はユーザーのウェブ上での移動経路や、検索結果などを把握し、その人の趣向に合わせた商品を紹介することが出来るようになった。店舗では、POSと呼ばれる端末機に記録される売り上げの推移や特定商品が売れる時間帯に関する統計データを他店舗と共有し、在庫が残らないように商品を発注をしたり、Aという商品を買うお客様が選ぶ可能性の高いBという商品を特定し、商品陳列を変更することもある。

しかし、ビックデータの裏には致命的な問題点がある。あまりにもデータ量が多いため、分析過程でバイアス(誤差)とノイズ(求める情報とは関連性が少ない情報)が含まれる可能性も高いのである。統計はあくまでも確率に基づいて予測を行う。

ビックデータのように情報量が多い場合、サンプルを取ったり、分析する過程で数多くの変数が入ってしまい、変数間相関関係や変化の程度を正確に測定するのが大変難しくなる。それに加えて、ネット上のユーザの動きを同意なしにトラッキング（追跡）し、個人のプライバシーを侵害する可能性もある。そして、確保した情報が信頼できるものかどうか、確認することが難しいという問題も持っている。

この問題に対して統計学者やデータ分析家たちは、新しい解析法を工夫したり、分析技術を向上させることによって対処してきた。2008年のアメリカ大統領選挙結果について、50の州のうち49の州の結果を正確に予測して有名になった専門統計分析家ネイト・シルバーは、彼の著作『シグナル&ノイズ』で、ビックデータのような変数が多く膨大な情報が存在する場合、数学の「ベイズ推定」を用いると、ある事件が発生する前に持っていた情報（事前確率）を活用し、事件が発生した原因に対する確率（事後確率）を求めることができるという。

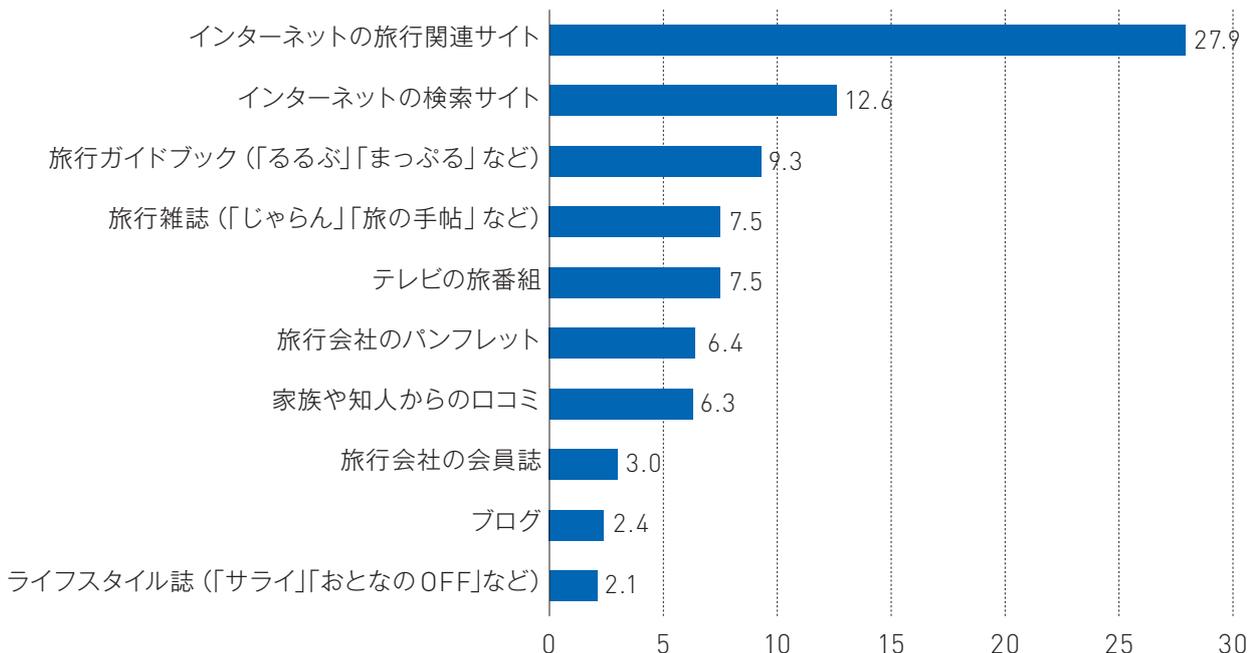
ある人が癌を患う確率が1.4%だと仮定してみよう。癌診断をする時、結果が正しい確率は75%、間違っている確率は25%だという。この場合、ベイズ推定を用いると、検査を受け、癌だという結果が出た時、実際癌を発症している確率は11.9%になる。ここで事前確率は1.4%で、検査結果癌だと判明された後、

実際癌になっている確率は事後確率で11.9%だといえる。この結果は、検査の不確実性という事実を反映し、実際癌を患う確率を計算したことから意味を持つ。

もう一つの例として、進化的アルゴリズムに注目したい。進化的アルゴリズムとは、データや分析結果を集めてメタヒューリスティックな最適化を実施し、進化的計算を行う人工知能である。癌の例で考えてみると、実際に癌になった人のリスト、癌検診結果、その検診結果が間違ったケースなどを全部集めて、指定された確率で模擬実験を行う。普段何十年もかかる実験を、シミュレーションして短期間に無限反復させ、その結果を記録し、結果からさらに癌発病の要因になる可能性が高い要因を分析する。

ビックデータは、このような技術的補完がある時、真の価値を持つ。しかしその進歩は、どんどん人間の仕事の領域を脅かしている。今はまだ未熟な段階であるが、2030年頃にはこのような技術がより広い分野で活用され、個人の趣向分析や疾病管理から飢餓問題、地球温暖化まで、数多くの課題を解決する道具になっていくと予測されている。つまり、伝統的に人間の領域だと考えられた判断と予測の問題さえも、コンピュータが解決する時代が近づいている。このような時代の変化は、私たちに何を示唆するのか。

図1 旅行先選択の決め手になることが多い情報源



※公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部によるオピニオンリーダー層へのグループインタビュー調査 (2008年12月) より

### 3. デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか： 進歩する技術の中で人間が持つ力

『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』というタイトルの小説がある。1968年に出版されたこの物語は、核戦争が行われた後の地球を舞台にしている。大多数の人間は火星に逃げてしまい、地球には火星から逃げて来たアンドロイド（ロボット）と少数の人間が共存していた。主人公のリックは家で電気羊を飼っており、怪我をして働けなくなった友人の代わりに火星から地球へ不法に入ってきたアンドロイドを退治する仕事を始める。リックに与えられた任務は、人間とほぼ違いがない、新型アンドロイドを破壊することだった。この世界でのアンドロイドと人間の差は、他の生命体に共感できる感情を持っているかどうかである。動物は核戦争でほぼ絶滅してしまい、生きているものは高い値段で売られている。リックの夢はアンドロイドを退治し、その懸賞金で本物の羊を買うことだった。

しかし、彼は任務を果たしながら、自分の仕事に疑問を抱いてしまう。人間のように美しい歌を歌うアンドロイド、そして放射能に汚染された人間を徹底的に疎外し、いじめる人間の残酷性を目にして、どちらが正しいか分からなくなったのである。このような悩みが、私たちの世代にはどんどん深くなっていくと考えられる。2030年代になると、さらに進歩した形の技術、例えば3DプリンタやIoT（モノのインターネット）が実用化され、毎日の選択——例えば何を食べるか、何を着るかなど——をコンピュータが代行するようになると予測される。人間は技術の進歩やデータの力で「不確実性」という障害物を壊していく一方で、守るものとしての「人間性」を、哲学ではなく生存の問題として再び考えなければならぬかもしれない。

技術の発展は人間の生活をより豊かにしてくれたが、その分、考える力や周りへ関心を注ぐ機会を奪ってしまった。クリック1回でほぼ全ての知識が調べられる世界で、わざわざ頑張って世界地理を暗記することは無駄だと考えるかもしれない。ネット上でも遊べる人はいっぱいいるのに、顔を合わせ気を遣わなければいけない友達に時間を使うのは疲れると思う人もいるだろう。しかし、考える力や他人の感情に共感しようとする態度があるからこそ、人間は人間らしく生きていられるのではないだろうか。

私たちが「人間らしさ」を守らなければならないもう一つの理由は、生物学の中でも見つけることができる。かつてハーバート・スペンサーは、「適者生存」という概念を通して、「自然は生き残る種の特徴をランダムに選び、最も環境に適している、生き残った固体の子孫がより増え広がる」と主張した。これは、競争で勝ち残ったものだけが増え広がるという意味ではなく、むしろ自然がいつ、どう変化していくか、完全に予測することは人間には出来ないため、種全体の生存率を高めるためにも障がいがある人、社会的弱者などと助け合う必要があるということを示す。

今の基準ではあまり頼りになりそうもない人でも、先の小説のような地球滅亡の危機が来た時、彼の体の中に新しい環境に適応出来る力が潜んでいて、生き残り、新しい社会を再建していくかもしれない。他人に共感したり、集団生活をしながらお互い助け合う文化は、人間の生存のために必要不可欠な条件のひとつだった。人間同士の協力がなかったら、人類の文明がここまで発展することも出来なかったのは明らかであろう。

### 4. おわりに 選択代行時代のコンサルティング： マクロからミクロへの進化

それでは、このような変化の真只中で、私たちが「創るもの」とは何か。私はコンサルティングからその答えを求めてみたい。今まで「コンサルティング」と言うと、何か巨大なシステムを構築したり、有名な会社の未来を左右する戦略を立てるなど、大きなプロジェクトに関わるイメージが強かった。しかし2030年代のコンサルティングは、このようなマクロの領域だけではなく、ミクロの領域まで拡張し、私たちの様々な日常生活の問題を解決したり、選択をする時に役立つようになると考えられる。

人が認知可能な範囲を超えて情報が広がり、選択可能なものが多すぎると、人々は混乱を感じて、むしろ考えるのをやめようとする可能性がある。ビックデータの機械的分析や人工知能による予測は、このような混乱の時期には人々の意思決定を手伝う有用な道具になれるが、人の心に伝えるあたたかさや優しい助言までは期待しにくい。私たちが毎日出会う選択という機会は、ただの情報だけではなく、個人の趣向や意思が反映される所で、より複雑な性質を持つ。

溢れる情報の中で、人間は誰を信用して自分の情報を任せたり相談すればいいのか、分からなくなってしまう。このような隙間をコンサルティングが埋め、より合理的な意思決定が出来るように手伝う必要がある。人間は、データだけでも感情だけでも生きられない。そのどこかでバランスを取って、不安な現実から安定感を求めるためにも、他人の手助けを必要とする。このような時代的要求によって、相談とコンサルティングは融合していく可能性が高い。データだけならコンピュータでも求めることができるが、それ以上の何かを求める人たちがいる限り、コンサルティングはこれからも存続して行くのだろう。

自分も知らないうちに自分の検索結果や消費パターンが分析され、コンピュータから最適消費パターンを勧めてもらう選択代行の時代を目の前にしている今、私たちは道を迷いながらどこかに辿り着くため、新しい神託を求めている。そしてビックデータという「電気羊」と、人間のあたたかさという「本物の羊」の中のどこかにコンサルティングがある。

## 参考文献

- ・ 公益財団法人日本交通公社ホームページ「インターネット情報の氾濫と「外れ」リスク」[コラムvol.69]、2009年2月13日  
<http://www.jtb.or.jp/researcher/column-information-internet-risk-shioya>
- ・ Manuel Grana [Information Processing with Evolutionary Algorithms: From Industrial Applications to Academic Speculations (Advanced Information and Knowledge Processing)] Springer London; 1版、2006年
- ・ チャン・グンヨン「心理学オデッセイー私が知らない私を探して行く冒険」イエダ出版社、2009年
- ・ 一般社団法人ソーシャル・デザイン Social Design News「旅しながら働く。oDeskの調査から分かる「デジタルノマド」という大潮流」  
<http://social-design-net.com/archives/12141>
- ・ ネイト・シルバー『シグナル&ノイズ：天才データアナリストの予測学』日経BP社、2013年
- ・ ビクター・マイヤー＝ショーンベルガー『ビッグデータの正体：情報の産業革命が世界のすべてを変える』講談社、2013年
- ・ フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』早川書房、1977年
- ・ マルコムグラッドウェル『ティッピング・ポイント いかにして「小さな変化」が「大きな変化」を生み出すか』飛鳥新社、2000年

## 【受賞者インタビュー】

### 字数制限内で 伝えたいメッセージを 表現するのに苦労した



#### —— コンテストに応募した理由、きっかけは？

学校に貼ってあったポスターを見て興味を持ち、応募しました。

#### —— この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

構想やアイデアを絞り出すのに1週間ほど、書き上げるまで1週間ほどかかり、合わせて2週間ほどかかりました。

#### —— この論文を書く上で苦労したことはありますか？

字数制限に合わせて話したい内容を圧縮し、表現するのが大変でした。そのため、ディテールを諦めて、伝えたいメッセージを集中的に書くことにしました。

#### —— この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の中で漠然と考えていたビックデータや、最近の統計的分析法の問題点などを人文的視点でちゃんとまとめられたことです。

#### —— 今、どんなことに興味を持っていますか？

日本の未来、特に移民政策や外国人労働者の受け入れ、その中でも特に高度人材育成政策や留学生の就労状態に対して興味を持っています。